

124
17
24

三
七
全
傳
南
柯
夢
十
三

122
17
24

三七全集

占夢考有後記

第三篇

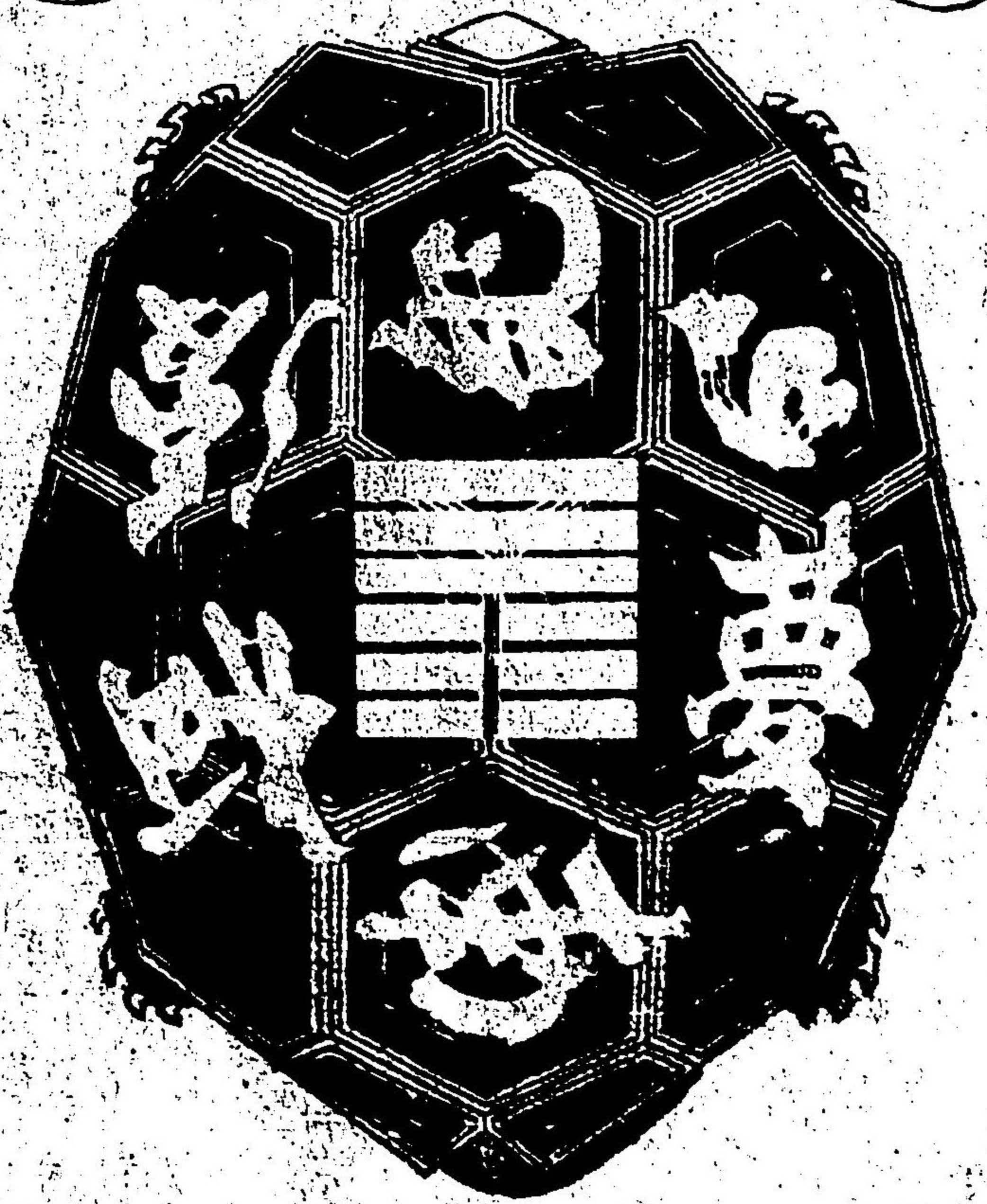
館書圖京東			
一	六	二	小
冊	號	架	說
			門
			類

曲亭主人著

三七廣傳

長師北原畫

國字小說



壬申發兌

第三篇

再編占夢南柯後記序

明治

洪容齋曰

漢藝文志七略雜古十八家以

黃帝長柳占夢十一卷甘德長柳占夢二

十卷為首其說曰雜占者紀百家之象候

禮大卜掌三夢之法一日致夢二曰

簡夢三曰咸陟鄭氏以為致夢夏后氏所

作簡夢商人所作咸陟者言夢之得周人

取焉而占夢專為一官以日月星辰占六



何可...

夢之吉凶。其別曰正。曰噩。曰思。曰寤。曰喜。曰懼。季冬聘王夢。獻吉于王。王拜而受之。及舍蒞于四方。以贈惡夢。舍蒞者猶釋采也。贈者送之也。詩書禮經所載。高宗夢得說。周文王夢帝與九齡。武王伐紂。夢協朕卜。宣王考牧。牧人有熊。熊虺蛇之夢。召彼故老訊之。占夢左傳所書尤多。孔子夢坐奠於兩楹。然則古之聖賢。未嘗不以夢爲大。是以見於七略者如此。魏晉方技猶時

或有之。今人不復留意此卜。雖市井妄術所在如林。亦無一人以占夢自名者。其學殆絕矣。又李瑩財貨銘曰。財貨將至。夢寐可尋。或穢或虺。乃玉乃金。穢可親。虺可玩。歟。敢獻斯銘。以激貪夫。由此觀之。夢非故有吉凶應報。而爲有吉凶應報者。偶然耳。諺曰。癡人面前不說夢。余所說豈夢寐吉凶耶。人間萬事莫非夢者。因命是篇。以覺蒙昧云。辛未初冬朔。玄同陳人識。



松平貞次郎

赤松十郎



五世神前
御前
御前
御前
御前

五世神前

の終り人の詩と賦一文と似る。檢子汝右の壁に貼して常住坐臥不
 此をてん。こを金とく。り一字の損益あるは必しこを改むるに余が
 毎歳の著編の速成をりて利き。この著は終て一七の蒙本と更じ。じか
 五六日。まづ時代を定め地名をト。人名を撰。許多の脚色を巧生。まづして
 藤と綴る。まづその動不任。文の意も出さ任して且も止。度り手不遠
 彼のうら。か。さ。り。たる。お。懐。腹。あ。ら。た。の。粘。り。て。ま。づ。改。め。の。こ。余。嘗。我。編。み
 一風をま。文と雅俗をま。う。と。り。とも。雅を好ま。と。こ。婦。幼。不。通。易。う。ら
 ざる。な。又。唐。山。の。信。語。と。切。ぬ。な。ま。せ。と。こ。読。者。文。字。自。ま。れ。と。讀。み。隨。く
 願。け。ま。ば。こ。但。その。越。難。劇。は。似。る。あ。り。あ。れ。れ。も。難。劇。と。同。く。う。ら。又。難。劇。は
 似。る。あ。り。あ。れ。れ。も。難。劇。と。合。さ。る。が。如。件。里。耳。み。入。る。さ。り。て。肯。と。さ。る。の。こ。
 今年著と。亦。年。の。比。有。る。こ。の。著。編。指。を。使。は。至。さ。り。人。とも。未。嘗。皆
 所。不。難。者。能。く。難。者。の。類。に。不。し。

玄同陳入再議

三七全傳 白夢南柯後記卷之五

後快第一

東都

曲亭馬琴編次

附言

ち。う。そ。の。物。々。り。ハ。天。文。十。九。年。子。記。て。同。二。十。一。年。子。記。て。前。後
 僅。三。年。と。経。り。蓋。前。快。四。卷。よ。説。と。同。天。文。十。九。年
 冬。十。月。六。日。赤。根。半。之。進。又。子。文。婦。蟻。松。曾。左。郎。亦。浪。速。の
 法。善。寺。に。考。妣。の。善。提。を。用。ひ。し。の。敗。藏。全。女。が。養。母
 晚。橋。が。夢。の。事。孝。子。全。女。十。日。墓。子。記。本。を。撰。て。は。む。て。父。の
 仇。人。を。知。る。の。敗。藏。四。五。六。暗。全。女。と。な。さ。る。と。蟻。松。曾。太。郎
 面。を。犯。し。て。頓。勝。と。諫。る。と。赤。根。半。之。進。君。命。受。て。不。谷。山。へ
 赴。く。の。標。本。の。林。原。よ。全。女。赤。根。半。之。進。と。埋。伏。さ。る。の。晚。橋

頼朝が
松平作
君を
作

松平作

平之進

三三

頼朝が
松平作
君を
作



絶ちぞよ扱よんば半之進莞尔と笑も保元の順逆ハ先替既ハ
えと論む上の足才牆下園下ハ親子仇とるも三綱素直
人道まどろ君も又如此る。使者の人侍らろえがし全
う君のおん憐る。とせもあぶど眼を睜く。后とて君を扱せ
こま忠義といふべ致さる馬鹿りの主とまへ傳頭剣さぬ
前袖を拵て去る言承せぬ命令惜むや。争争命を
惜む。まろくが仰を推辞るや。争争仰を推辞まろくさん
推辞ざら切腹の用意。とつそがせま。進座とては沈
る女房を借とんずりてや三務。縁で覚ぬの上の扱よ。と
丸とる武士の妻もぬど。保元の折。後。断刀とくりてと焦燥
あど。是罪ゆるみ。とて。扱ひ。る。扱ひ。て。講。入。り。花。の。水。も

湯とるれど。早死。の。世。と。多。く。も。又。多。く。後。と。ま。
身と起し。國遠け。ま。有。か。し。も。お。通。陶。五。郎。ハ。ワ。を。ま。お。ま。
せめて。ま。七。が。宅。ふ。と。ま。ら。草。と。も。あ。ら。ま。の。死。ま。あ。く。
後房。お。妹。ハ。と。ん。ど。良。人。の。末。期。と。外。あ。り。て。面。半。せ。ぬ。ハ。鬼。於。蛇。能。
ま。が。腹。貸。ら。ぬ。と。只。い。ら。る。ま。ら。ま。ま。ま。も。赤。根。の。子。と。ら。あ。
の。ま。の。誓。言。款。と。て。の。あ。く。て。も。五。十。倍。の。も。墓。あ。く。お。と。あ。り。と。と。て。
出雲の神や。結。び。け。ん。今。う。ふ。と。め。ぬ。悪。縁。の。糸。の。糸。と。ら。ふ。せん。
と。潜。然。と。し。て。納。戸。の。ろ。ろ。と。ま。ん。と。ま。ら。ま。遣。り。も。る。ま。ら。平。地。ち。と。
声。と。り。け。内。室。且。く。崗。の。人。肚。割。刀。ハ。こ。ま。あ。り。と。い。ひ。つ。腰。あ。る。
扇。と。取。て。半。之。進。不。投。よ。る。後。膝。へ。も。落。さ。ご。右。手。も。受。扇。と。用。て。
刀。と。ハ。と。間。が。平。地。膝。と。り。寄。せ。式。紙。法。ふ。よ。う。て。自。教。と。評。さ。る。ん。

眞の武士のついでに傳頸刻らるるに罪犯るれども當家の家
 廻一等降下して古例に任する扇腹女階の親子の好む平能は
 つつしまと亦是君の命こと死示せばさ進ハ扇とさうの海で
 嘆息しその罪はあつたにせよともまを違ると死入君の非を誰か
 知しつゝはまよ疎言を言はせざるはさるるあまよ木谷の心はては
 月よ睡をせまんとさひいとも鳥の常齒詰る今今こゝ死て益
 りた承の命とれなむとこり後祖と扇と取て戴かざるりとし
 抜く平能が又の光りつ三勝入るにせらるるも忍むと走りぬ
 笠松の妨とると長袴の裾進りて寄つて左へ入る。膝中
 右手に携る紙束さ進るるふは堪むと妻の帯際より戻し膝中
 押して動せむと女階と合掌とんば徒丸の親念のなき平能は

又か背後に刀尖を刺し入り突生し又はしを引く。又か
 直りつゝが肚帯の猪目のあつと非と断まがとるりし初る
 帯とさよ小鮮血とると滴り大腸小腸長ずる。とつと生む笠松の
 舌づもは堪むと又と捨て腎丹は挫と倒るる。青丹倍と見えたる
 手之進りあつとふらちも騒がむと孩見あつと中簿しよ。汝さうつ
 身つるんかめやう血まの常るる。力のあまは呼吸絶えぬ。
 際漢肩ぬとさうのうら。そのせんやうをえんつと又よ代て死ん
 とるの子の志るるふけしど。汝も笠松氏と肩せしは口がふる。中
 きてはらがふるあふは。実又ふ者死すとも。養父を断りては
 の。だ。うらと汝志をけり。と聴く察する言の勢もあつと
 教ゆる子の為し思愛の涙落る。膝も放れぬ三勝の慌忙に

まくばし進を許さるゝの法はせんやう素直にせんかへんか
 願掛が牙の非と飾るに似えんども臣とて君は勝とりて
 心根が不意とせん且くは我推籠おれて又せんまへも
 あらざるはひらひらと底意とがあらはれしはせん進の世を
 憤りし自害さるゝやとさし平てまをせしの中流へ
 捕おれりし思愛の絆を被てま進の自害と禁ん為さるゝなる
 心ひらざるは七の又親とさるゝあまの法を犯せしが罪科腹を
 ころしとさるゝ玉枕がむしりて彼ホ主婦と延しとるゝあま
 限する日数由果新よ半七がぬま衣のあはれ名とまされば今や
 ま進と免さるゝ免さればとてつらまでる罪さるゝの
 願掛が病着の跡よりまの心よりま根が三男平絶を竊よ

言を説て試みるに親の危窟とさるゝゆゑに面りよ肚を切
 孝を勇敢傳せし惜むに堪へる仕後さるゝもその深瘡への助り
 かへんまのあれど早やと拘死とさるゝは父は代て死さるゝ
 りて一旦ついでにさるゝ進半之進半七が罪免さるゝ道を行
 たりせめてそのまの苦痛を忍びて実父の宿所へよとて其
 曆よりよかま意とけり親を夫婦一生の絆別をもせしと
 仰下されて几帳を被りて一連とみづから取て平絶の瘡口を
 後せのい感涙数りよるひらひら君思念を牙は溢してま
 へし言をさるゝ只伏拜を伏拜を涙はたれやうやう遠侍まをす
 生病の再度と被帯とを利する私率某甲を招く。竊よまの

親と母と妻とよき言はせり病中の使者きたりて橋を渡りて
 親の家よりけりけり主君の思ふ事と代りて言はせり
 親の言はせりけり親は言はせりて法外ある事動せりや
 君令次言はせり言はせり言はせり言はせり言はせり
 周防ある姉弟へ便由ありて平相が今果の一句傳へて
 遺言進んで母の妻の僕三郎の平太郎と外母の前
 背へ生育後中全松の家をいじて言はせり言はせり
 声なりもく歎きの聲は三勝と名にと胸の裂けが如く傳へり
 振うは叫べば真ありと声立ては國を夏山が抱け四人
 友青く親子三人頼び生なは存は推し言はせり言はせり
 言はせり言はせり言はせり言はせり言はせり言はせり

へて神の両足有りて松と石とを言はせり言はせり
 廿一初孫を中へ奉りて言はせり言はせり言はせり
 結句を説き親子の縁自教の言はせり言はせり言はせり
 諸君よ生る言はせり言はせり言はせり言はせり言はせり
 まて孫推して言はせり言はせり言はせり言はせり言はせり
 生死の境りの言はせり言はせり言はせり言はせり言はせり
 断る言はせり言はせり言はせり言はせり言はせり言はせり
 あり吾情過世の言はせり言はせり言はせり言はせり言はせり
 文道孝を言はせり言はせり言はせり言はせり言はせり言はせり
 何れせんその言はせり言はせり言はせり言はせり言はせり
 かく言はせり言はせり言はせり言はせり言はせり言はせり

平太即言者五
 平太郎が声は平他入色やまゐる眼と用さ母に
 夏も武士の女児は似げあれた秋傷時夜通骨は
 母は足ふざややくもふてやよ家さる人今日より用居
 用門の赦免状頂戴あれと刀の下緒よ結び著せ見え出とまき進
 のと死なせぬと又眼と閉黙然として居るに免状と受て
 形を改め双の手に押戴さる。うち用居て瀆く。微臣が孤
 空しうべ主君教慢の作さるをひるかへる。災害消滅徳井
 家のまじく繁昌まゐらん我れ併平他が忠孝の致と祈り
 子ながら竹帛よまめて永く功と賞せん通奇特と押用
 あく扇の言葉の要とれらひもつて安堵しとれやと
 取あづる刃は舞る母女房も共の場もまもる

同胞四人遠離よびて七かへりて。通陶五郎木が後
 遠くもあつたれ。現直はるのり半七の出入り
 百里とやらん。二百里とやらん。一里は花きの畑
 遠の河よ。かきかひで。西の天を恋一けし。周防
 青耗も。兼山の所。人の来りしと。やうぬ
 遙の天も。歎の霧粉。大男子。お戸は。ま
 半の進を。信と。住進。あ。の。声と。共。全。擲。捨
 下。六。腹。巻。糸。小。手。髓。當。緑。類。ち。く。牙。と。せ。る。鎮。は。端。で
 息の肩より揺出と。長途の労と。入。て。い。ま。は。

志ろ、（め） 草狩（くさうり） して慰（なぐさ） めんとて、（い） 龍（りゆう） の法泉寺（ほふせんじ） は三日三夜
（ご） 御座（ご） 二程（に） せん、（お） 托（たく） 山の鳥（とり） 飛（と） 催（もよほ） する、（か） 法（ほ） 妙（みょう） は晴賢（はるけん） へ、（し） 軍（ぐん） 兵（へい） 等（ら） が
（い） 生（い） 立（だ） せ、（そ） 隆（りゆう） はんせ、（ま） ぬ、（と） 披（ひ） ち、（い） 廿九日（にじゅうくにち） の曉（あけ） 方（かた） は法泉
（し） 寺（じ） へ推（おし） して、（あ） 岡（おか） と咄（とつ） とつ、（と） 摠門（もつもん） よりぞ乱（みだ） 入（い） り、（そ） 隆（りゆう） 主（しゅ） 杖
（ご） 五十餘人（ごじゅうごにん） ぞひり、（さ） ころ、（れ） ば、（の） 脱（だ） 走（そう） 所（しよ） と教（ま） して、（い） 出（い） 入（い） り、（ま） 女（め） の
（し） 賊（ぞく） 兵（へい） 或（ある） ぞ射（や） 落（お） ち、（つ） 突（つ） 伏（ぶ） 雜（ざ） 伏（ぶ） 瞬（しゆん） 間（かん） は三十餘人（ごじゅうごにん） を撃（う） ち、（も）
（た） 款（くわん） 乃（の） 射（や） らば物（もの） とせ、（と） 雁（かり） 野（の） 澤（ざ） 正（せい） 就（しゆ） 津（つ） 入（い） 道（だう） 躬（こう） せ、（と） 入（い） り、（と）
（い） 息（いき） せ、（と） 四（し） 方（ほう） より火（ひ） を放（は） ち、（あ） 嘯（せう） 叫（けう） や攻（せう） 入（い） り、（と） 宿（しゆく） 直（ちく） の
（ま） 近（きん） 習（じゆく） 少（せう） 泉（せん） 隆（りゆう） 豊（ゆ） 天（てん） 野（の） 德（とく） 内（ない） 三（さん） 浦（う） 井（い） 田（でん） 仁（に） 保（ほ） 石（しやく） 田（でん） 令（れい） と際（さかい） と
（し） 柳（やなぎ） 箭（や） 射（や） 尽（じん） り、（と） 細（こ） 針（はり） 刺（さ） ら、（と） ち、（と） 射（や） 死（し） と、（と） 隙（ひま） は隆（りゆう）
（し） 朝（あ） 臣（しん） へ廣（ひろ） 塚（づか） 小（こ） 寺（じ） の生（い） 羊（やう） 馬（ば） 射（や） ち、（と） 敵（てき） を推（おし） して、（と） 柳（やなぎ） 箭（や） 射（や） 尽（じん） り、（と）

（し） 小（こ） 藤（とう） のり、（と） 射（や） ち、（と） 敵（てき） を推（おし） して、（と） 柳（やなぎ） 箭（や） 射（や） 尽（じん） り、（と） 隙（ひま） は隆（りゆう）
（し） お不（お） せ、（と） 客（きやく） 殿（でん） は、（と） 入（い） ち、（と） 腹（はら） 切（き） り、
（し） み、（と） 雲（う） も、（と） 風（かぜ） の、（と） 跡（あと） 残（のこ） ら、
（し） と、（と） 猛（まう） 火（か） の中（な） は、（と） 茶（ち） 毘（び） の、（と） 煙（えん） と、（と） 火（か） の、（と） 中（な） は、
（し） 竹（たけ） の、（と） 果（は） ども、（と） 三（さん） 勝（しやう） 堂（だう） 月（げつ） と、（と） 注（しゆ） ち、（と） 痛（いた） む、
（し） 耳（みみ） を、（と） 傾（か） け、（と） 奇（き） く、（と） 進（しん） 膝（か） 立（た） 直（ちく） 下（げ） 陶（たう） が、
（し） 面（おも） の、（と） 額（ひたい） を、（と） 拊（ぶ） さん、（と） 中（ちゆう） 將（しやう） 義（ぎ） 基（き） 朝（あ） 臣（しん） へ、
（し） く、（と） 晴（は） 賢（けん） 中（ちゆう） 所（しよ） へ、（と） 推（おし） して、（と） 追（お） 腹（はら） 切（き） せ、（と） 痛（いた） む、
（し） 小（こ） 養（やう） 又（また） 持（ぢ） 院（いん） の、（と） 一（いつ） 忍（にん） 行（ぎやう） 中（ちゆう） 陶（たう） 阿（あ） 波（は） は、
（し） 四（し） 人（にん） 團（だん） 々（々） 晴（は） 賢（けん） は、（と） 属（ぞく） 志（し） 々（々） 天（てん） 地（ち） 反（はん） 覆（ふく） 時（じ） 節（せつ） 到（たう） 来（らい） 志（し） 々（々）

日記六
 室町殿
 の歌々
 室町殿
 日記六
 室町殿
 の歌々

（し） 四（し） 人（にん） 團（だん） 々（々） 晴（は） 賢（けん） は、（と） 属（ぞく） 志（し） 々（々） 天（てん） 地（ち） 反（はん） 覆（ふく） 時（じ） 節（せつ） 到（たう） 来（らい） 志（し） 々（々）
（し） 小（こ） 養（やう） 又（また） 持（ぢ） 院（いん） の、（と） 一（いつ） 忍（にん） 行（ぎやう） 中（ちゆう） 陶（たう） 阿（あ） 波（は） は、
（し） く、（と） 晴（は） 賢（けん） 中（ちゆう） 所（しよ） へ、（と） 推（おし） して、（と） 追（お） 腹（はら） 切（き） せ、（と） 痛（いた） む、
（し） 面（おも） の、（と） 額（ひたい） を、（と） 拊（ぶ） さん、（と） 中（ちゆう） 將（しやう） 義（ぎ） 基（き） 朝（あ） 臣（しん） へ、
（し） 四（し） 人（にん） 團（だん） 々（々） 晴（は） 賢（けん） は、（と） 属（ぞく） 志（し） 々（々） 天（てん） 地（ち） 反（はん） 覆（ふく） 時（じ） 節（せつ） 到（たう） 来（らい） 志（し） 々（々）

槐姫の貴殿の息女お通どのと仙野呂東二ノ冊巻後門より
 蔵のひしと慥は夕ゆと往方を志す。主の先途よそありぬ某
 何を面目ある存命べき。單身ありとも。城軍の中よまゝ入る
 たり。死よ死を名や。とどひひか。從賊兵二騎三騎殺つて死に
 とも。九牛が一毛あり。大和へは進るさなや。とどひひくへて百四里を
 僅五日よまのむら。つべまゝのい果し。牙の憐のよけり。欲あ
 くのど。と腰の刀を吐へつたま。引續じ。庭の井筒へ跳入り
 かくて空しくあり。しるが半之進へ今更よこを憐と彼をあり。ま
 安檢らぬ主家の大事。天より仰ぐて歎息し。いぬ我如月
 米谷あり。本精振鳴動し。一條の妖火西を投て飛去りしと
 攜文ホが告訴する。しるがかりか。原素彼風流士の大カ周防

山口飛来て大内家の仇とる。はた大和のあはれ。ま福乃
 遂は彼外へ移薄す。時あるう。お命あるう。ままま
 親実か。ト笠神の如死とある。奇と。奇と。と嘆賞されぬ。三橋
 塞る胸うた拊女流るがら。雄く。死お通姫君のおん侍。く。一旦
 塚を延るとも。往したる。教する。ん。加旃陶五郎か。又もや。属
 けん。主もや。属らん。律の容る。紙。ま。海。と。し。ま。子。も。多。ゆ
 苦。した。胸。を。雲。を。た。こ。そ。と。推。量。り。せ。め。て。ま。七。が。彼。如。は。在。致
 去。つ。ら。ば。ば。厚。念。ぬ。の。け。ん。ま。ま。も。存。命。あ。つ。か。る。給。奈。乃
 締。を。釋。す。も。又。あ。る。ま。物。を。と。悔。や。悔。した。夏。ふ。ん。あ。り。ひ
 危。か。た。ア。が。所。天。の。ま。時。も。奇。く。兄。弟。四。人。の。死。共。よ。一。世。ろ
 厄難生死の際此身よし。親と親の。は。さ。う。あ。り。ひ。や。ら。う。と。

ある人と説諭セが呂東二ハ今更无ぬるふえ死すれどとありひ
カシと刃を収めしどさうが引くして再て安否を告すらん余と
さうりひひうけを去るをせき進ハ且くと咄びとあつるさうりひ
予殿の腰間路費の用意ありとほ儀別せんとは同る程櫃の
蓋うち開きと投与する包銀厚志謝するに堪へると押戴つ
呂東二ハ背をも不を見て尚歩よ折戸を出てを失ふ今果
るりける平仙ハ袴の容子ふ先と激し口が又出件ゆふとも青
陶五郎ハ逆臣する情賢ハ美子するれば口が君の死あれりん状
不覺に出仕ハ危かんとしハ赤根ハうら点改汝が異見その
理ゆいふれども陶五郎ハ養父が野の奴隷ぞまうぬ君を
我はる親あふとせしめたる人事とハ侍ハヤさんハ不慮うらうら
出仕の供せせよと焦燥ハ涙を禁て三勝が背より被さる肩
衣も晴まぬぬひの晴小袖見たる雲を夏心ハ葵扇の写り
怪惟子ハ又君所へ子の死出の旅迷つべりの奴三勝ハ敷しヤ
まは周防の女見とま子とゆ子をもお侍つるの中出てゆく
主人と送る奥と門従者あるらば強接箱奴隷がる何と中接
兼の草履穿ぎよ遠く。続けく。といふ声といく潮と死り
平仙ハ撲地と後死骸の上よ身を投りて雲を夏と夏心ハ
つらと泣く。こまやわが子の終焉あるらんとどくとも亦んく
連るがびら背後あしとせし進ハ喘と君所を投て去るぬ

古夢南柯後記卷之五終

122
17
24

